

森村・川村ゼミ後期グループ発表レジュメ

(小原・田中・元島)

2006年9月27日

**モダニズムの絵画 Modernist Painting**

**抽象表現主義以後 After Abstract Expressionism** クレメント・グリーンバーグ

## 1. はじめに

今回、私達はモダニズムから脱却した新しい絵画の可能性を指し示すクレメント・グリーンバーグの美術評論を読み進めていく中で、絵画史におけるひとつのターニングポイントに遭遇することとなった。それをポストモダンと呼ぶのかは、まだ定かではない。

しかし、1950年代を生きる有象無象の画家たちによって（代表的な作家はここでは割愛する）従来の絵画の技法・位置付け、表現されたものに対する様々なアクションを通じて、この時代に芸術（アート）がひとつの、新しいステージへ踏み出そうとしているのは確かであるように思う。クレメント・グリーンバーグの評論の真偽や正悪を抜きにして。

私達はそのターニングポイントに立ち、絵画芸術の軌跡とグリーンバーグの考察から、モダニズム以後の芸術（アート）について考えていきたい。

## 2. モダニズム絵画の軌跡～キュビズムから抽象表現主義へ～

### ■モダニズムの姿勢

・モダニズムの特徴→自己-批判的傾向⇒自己-限定への到達  
絵画の自己-限定→色彩、三次元性などの排除⇒平面性の追求

☆ 平面性→絵画の唯一の特徴。

→見方の変化⇒最初に絵画を絵画として見る

→それは全くの平面になることでない⇒三次元空間を想像するものでなく、  
視覚的に三次元、でも想像は掻き立てられるものでない

### ■抽象表現主義までの苦境

・ 時代背景→{1930～1940年代}は、1929年の世界恐慌と1945年終戦の第二次世界大戦の狭間に位置し、社会的にも混乱したものであった。

- ・ J、ポロックなどの抽象表現主義台頭までは、キュビズムに縛られていた

☆ キュビズム／Cubism(1909~1914)→その特徴⇒『複数の視点』『構図の広範囲への行きわたり』『色彩の抑制』。

同時性→共同体験、多重視覚認識、色彩の同時的対照など。現代性への関心から。

伝統遵守→古典主義を新しい時代にふさわしいものへと変化さす。

分析的キュビズム→伝統的遠近法を放棄。オブジェを二次元平面に表し、その多次元的な面の表現を要求。

総合的キュビズム→色彩、テクスチャー、触覚的性質への興味復活。新しい視覚言語をつくりだす。

eg : ピカソ→

ブラック→

### 3. 抽象表現主義以後の絵画—重要な質を維持するために—

#### A. 閉じられたキュビズムと形骸化する絵画

- ・ 一種のスタイルとして形骸化し表面的に捕われてしまうのを避けるために
- ・ 開放するための非難と拡張

#### B. 額縁の裏にある絵画

- ・ モリスによる批評
- ・ 前進のための後退

→絵画が論理的思考によって進展していく重要な時期

#### C. より純粋に、より二次元性を求めて

- ・ イリュージョン／三次元性を排除 ⇔ デ・クーニング「女」←帰する場所無き再現性
- ・ 帰する場所を見出した作品 → ディーベンコーンの作品
- ・ 身体的再現性の排除

#### D. 残った性質、色彩

- ・ 色彩の自律性を表現
- ・ 陰影、明暗対比の固定概念の排除

ex) ロスコ／ニューマン／イヴ・クライン

#### 4. クレメント・グリーンバーグの考察

##### a. ニューマン・ロスコ・スティールへの賞賛

→制作や手法における妙技の放棄

自己一批判を経験的なものとして継承→新しいものへ転換

<平面性と開放性の強調>

モダニズム絵画の良しとした平面性を抽象表現主義で実現した時・・・

→絵画は色彩における陰影を排除すると同時に開放的になり、構想的な要素を持つ

##### b. 構想（コンセプション）という考え方

三人の芸術において問われている問題

絵画という芸術を構成するもの→良い芸術をそれ自体として構成するもの

→芸術の価値・質の究極の源泉＝構想（コンセプション）

##### c. インスピレーションの個人的領域（ex:ニューマンの絵画模倣より）

技量としての複製・模倣を可能にする一方、絵画の質が完全に構想のうちにある状態

→コンセプチュアル・アート台頭の予期？

#### 5. 考察

今回、私たちは1950年代のクレメント・グリーンバーグの美術評論から、モダニズムの絵画、それを受けて生まれた抽象表現主義の絵画に関する考察を考えてきたが、最初に述べたように、これらの一連の出来事をポストモダンの台頭とここで一概に述べることは難しい。彼はモダニズムを継承した新しい絵画の形として抽象表現主義を取り上げているが、再現性や三次元的イリュージョンを否定し、純粋に絵画的であることを意識する上で、絵画に様々な制約を設けてきた。（平面性の強調、色彩による陰影の否定、妙技の放棄 etc）そういった自己一限定の発想は、彼の言葉からも伺えるが、非常にモダンのでもある。

一方で、モダニズム絵画の延長にある抽象表現主義を模索していく上で出てきた「構想」や「インスピレーション」の考え方は、後のコンセプチュアル・アートに概念として受け継がれていく部分でもあり、自己一限定を推し進めていった中で見えた絵画史におけるひとつのターニングポイントでもあるということもまた確かである。

芸術の連続性という性質を自身の概念として確信し続けていたグリーンバーグは、抽象表現主義という時期／スタイルを通して、より進展していく絵画を求めていく。グリーンバーグが芸術の連続性という概念を通して、逆行的／マンネリズムに満ちた描写、スタイル／要素に頼った作品、これらを低質なものとして非難していく。そして最後に残ったも

のとしての色彩という要素を用いた絵画を賞賛していく形になるが、これもスタイルとして形骸化されてしまったら、グリーンバーグはそれをもまた非難するであろう。

しかし実際には、彼の構想（コンセプション）という考え方は、後のコンセプチュアル・アートでは、彼の描いた通りの展開は見せなかったかもしれない。三次元のマテリアルを用いたり、帰る場所のある再現性の作品が、彼の理解を苦しめたかもしれない。しかし、それらは全て、モダニズムの時代を受け、抽象表現主義のスタイルを受け、彼の美術評論の影響を受けているのである。そういった意味において、アートは連続的なものなのであるという判断ができるであろう。

私達は彼の議論の真偽や正悪を問いたいのではない。確かに極論も多いが、この時代に従来の印象的美術批評から、このような分析的美術批評へと突き進んだ彼の美術界における功績は、やはり賞賛されるべきものであるように考えるし、私たちがモダニズム・ポストモダニズムと呼ばれる芸術、そこから派生する様々な時代やスタイルの作品を、論理的に把握し理解するようになったのは、彼がこのような美術評論の中に芸術（アート）の連続性を考えさせる余地を与えていたからかもしれない。

そして、分析的且つ連続性という概念のもとに芸術（アート）を考えるという行為は、現代の芸術を考えることにおいて必ず受け継がれていくものであるのだろうか、その審議は現代において再考されるべき問題であると考ええる。

## <用語解説>

### コンセプチュアル・アート

「概念芸術」というその直訳の通りに、作品の物質的側面よりも観念的側面を重視した一連の作品群のこと。文字や記号による非物質的な表現がその代表例だが、「パフォーマンス」や「アースワーク」の記録写真などを含めることもある。61年にH・フリントが命名し、S・ルウィットによって一般化されたこの傾向は60年代の半ばから70年代の前半にかけて、それまでの支配的な動向であった「フォーマリズム」や「ミニマリズム」に対する反発として噴出した。

## <参考文献・参考サイト>

- ・ 『批評空間-モダニズムのハード・コア』／太田出版 1995
- ・ 『モダン／デザインのすべて AtoZ』／キャサリン・マクダーモット／スカイドア 1996
- ・ 『アート 芸術が終わった後のアート』／松井みどり／朝日出版社 2002
- ・ 現代美術用語集 <http://www.dnp.co.jp/artscape/reference/artwords/index.html>